

新聞で語られた東日本大震災における

「フクシマ」と「ふくしま」(2013)

Japanese Press Coverage of the Great East Japan Earthquake: The Diversity Written Forms of "FUKUSHIMA" and Their Respective Meanings (2013)

○小林 宏朗

Hiroo KOBAYASHI

立教大学観光研究所 Rikkyo University Institute of Tourism

要旨…本研究では、東日本大震災発生から1年間を対象に、『読売新聞』『朝日新聞』『河北新報』『福島民報』4紙の新聞で報じられ語られた福島をめぐるレトリックを、ニュースディスコース分析により考察する。分析の結果、福島は主に各紙の社説やコラム、川柳や短歌を含む読者投稿欄などにおいて、原発事故という破局的な事象としての「フクシマ」、復興と再生の象徴としての「ふくしま」、あるいは福島県民の郷土としての「福島」という表現によって報じられ、語られていたことがわかった。また、各紙の読者投稿欄では、負のイメージとしての「フクシマ」と、それを克服する表現としての「ふくしま」あるいは「福島」が、明確に区別して使用されていたことがわかった。

福島をめぐるレトリックが、4紙それぞれの立場や震災の状況によって共時的、通時的に変化していったことを見出したことが、本研究の成果である。

キーワード 新聞、東日本大震災、ニュースディスコース分析、「フクシマ」、「ふくしま」

1.本研究の目的

本研究では、2011年3月11日に発生した東日本大震災（以下、大震災）の被災地の一つである福島県が、代表的な全国紙である『読売新聞』『朝日新聞』と、大震災で被災した地域の地方紙である『河北新報』『福島民報』（以下それぞれ『読売』『朝日』『河北』『福島民報』¹⁾）4紙の新聞で、どのように語られたかを考察する。現在、福島県を語る際に「フクシマ」というカタカナ表記が、漢字表記の福島と共に使用されているが、この表記の違いはどこから生じるのであろうか。福島をめぐる表記の差異を分析するため、電子メディアが一時機能停止した大震災当初より、活字メディアとしての特徴を活かし、精力的に情報発信していた新聞を分析対象とする。原子力政策を推進してきた全国紙と、大震災と原発事故によって甚大な被害を被った地域の地方紙を分析することで、福島をめぐる各紙の多様なレトリックを描き出すことが、本研究の目的である。

2.先行研究

「フクシマ」というカタカナ表記が、福島第一原子力発電所での事故を指すことは周知の事実だが、この表現を明確に定義している先行研究は見当たらない。しかし、ある一定の共通見解を見出すことはできる。たとえば民俗学者の赤坂憲雄は「傷ついた場所」（赤坂 2012: 38）や「チェルノブイリ、フクシマと並べられる負のイメージ」（玄侑ほか 2013: 115）、「ヒロシマ・ナガサキ・フクシマという、世界のフクシマ」（鷲田・赤坂 2012: 217）といったように、複数の著作でその負のイメージに言及している。また、赤坂と対談した和合亮一も以下のように指摘している。

僕は、「福島」という言葉は、震災前は、ただ単に住んでいる場所だし、一緒に暮らしている場所だし、長年自分を育ててきてくれた場所と思っていました。だけど、震災後は、「フクシマ」という言葉の響きというものすべてを何か象徴するようなものになり、今回の震災のみならず、普遍的な、この日本が受けてきたさまざまな不条理な問題が「フクシマ」という響きにいま重なっています。（玄侑ほか 2013: 161）

「フクシマ」にかんしては海外でも、チェルノブイリ原子力発電所事故、「ヒロシマ・ナガサキ」さらにはアウシュビッツとの関連性をめぐる議論(Nancy 2012; Dupuy 2013)²や、「最新のテクノロジーシステムとわたしたちの代表制民主主義とにかかわる問題提起」(Bourg & Whiteside 2011: 11)として考察されるなど、活発な議論が行われている。つまり、「フクシマ」表記は総じて、原発事故だけでなく原子爆弾、さらにはアウシュビッツなどと関連付けられることで、世界規模で「いささか恐ろしい、あるいは過酷な名」(Nancy 2012: 4)として認識されている。

一方で、赤坂らは「ふくしま」というひらがな表記についても言及している³。赤坂は、自身が主催した「ふくしま会議 2011」の名称について「カタカナの『フクシマ』をやわらかく溶かすために『ふくしま』と、ひらがな表記にしたと述べている（鷲田・赤坂 2012: 217）。和合も『『ふくしま』にふるさとという思いがあり、やわらかな、お母さんやお父さんのぬくもりがある。子どもたちが好きなのは平仮名の『ふくしま』という言葉へのこだわりを紹介している（玄侑ほか 2013: 160）。また、赤坂が「フクシマの呪縛をやわらかく解きほぐしながら、幸福に満ちた福島（ハッピー・アイランド）をよみがえらせるという決意を込めて、ひらがなの『ふくしま』を掲げます」（赤坂 2012: 37）と主張しているように、「フクシマ」という負のイメージと対極のイメージとして「ふくしま」表記が用いられていることがわかる。

では、こうした福島をめぐるレトリックは、各紙においてどのように報じられ、語られていたのだろうか。

3.分析方法

本研究では上述した4紙を分析対象とする。有力な全国紙である『読売』と『朝日』は、原子力の「平和利用」や原発の「安全神話」イメージ形成に重要な役割を担った（井川 2002; Bruno 2013）。こうした日本における原子力利用の歴史との関係性、およびその発行部数に着目し、本研究における分析対象とされるべき新聞だと考える。

大震災によって新聞社自体が被災しつつも、ページ数を減らしながらも配達するといった、デジタルメディアにはない柔軟な対応力（河北新報社 2011）⁴と、生活情報や被災者の安否情報などの提供といった、被災者のニーズに適した地域密着の報道姿勢の地方紙は、「重要な情報源」として再評価された（福田 2012: 21; 遠藤 2011: 282）。本研究では、東北地方で県下の46万部を発行する有力地方紙である『河北』と、原発事故の舞台となった福島の地方紙である『福島民報』とを分析対象として選んだ。

本研究では、ニュースストーリーを様々なサブテーマ、あるいはトピックを連結する1つのテーマを中心に持つ構造物ととらえ、そのテーマを構成するサブテーマで使用されている用語のレトリックを解体していく、Zhongdang Pan と Gerald M. Kosicki のニュースディスコース分析を援用する（Pan & Kosicki 1993）⁵。「フクシマ」と「ふくしま」という言葉に焦点を当てるため、記事のレトリック構造に着目し、震災が報じられ始めた3月12日から1年間を分析期間とし、福島をめぐる各紙の共時的・通時的な相互作用を描写する。

本発表の分析対象は、各紙の「フクシマ」と「ふくしま」を含む記事すべてである⁶。『読売』は「ヨミダス歴史館」、『朝日』は「聞蔵ビジュアル」、地方紙2紙は「G-Search データベースサービス」というように、それぞれオンライン・データベースによって抽出した。抽出した記事から、建造物の名称やふりがなとして使用されている「フクシマ」と「ふくしま」を省いた記事を分析対象とした。その結果、最終的に分析対象となった記事は

合計 407 本となった。

	「フクシマ」表記個数	「ふくしま」表記個数	分析対象記事数
読売	88個	4個	67本
朝日	260個	32個	199本
河北	30個	24個	45本
福島民報	88個	39個	96本
合計	466個	99個	407本

表1 各紙の「フクシマ」と「ふくしま」表記個数と分析対象記事数

4.分析結果

(1)各紙における福島

分析結果からは、被災地としての福島という県名に対し、「フクシマ」表記はスリーマイルやチェルノブイリといった過去の重大な原発事故や、福島第一原発事故への世界各国の反応と関連して語られる際に、全紙において使用されていたことがわかった⁷⁾。特に、原発事故を含む破局的な事象として、記号的に使用されることが圧倒的に多かった。最も分析対象の記事が多い『朝日』は、事故への海外の反応や原子力政策、さらには原子力爆弾との関連の中で「フクシマ」表記を他紙以上に多用していた。

『福島民報』においても、「フクシマ」表記は相当数散見された。しかし、「原発事故の発生以来、『フクシマ』が新聞やテレビなどで連日、報道」されることによる「断片的な理解が風評をもたらす」（『福島民報』2011.4.19）という指摘からは、「フクシマ」表記が外部から不当に付与された負のイメージ、という認識があることがうかがえる。他紙による「フクシマ」という意味づけに対し、『福島民報』は「ふくしま」というひらがな表記を、県民の帰るべき「古里」を指す表現として使用することで対抗していく。たとえば、「放射性物質という『見えない恐怖』による風評被害」（『福島民報』2011.3.22）の発生を懸念し、「絆をさらに固めよう。美しい古里をよみがえらせ、歴史と伝統を未来へつないでいこう。ふくしまは負けない」と呼びかけている（『福島民報』2011.4.11）。こうした文脈の中で、「ふくしまは負けない」を始め「うつくしま、ふくしま」「がんばろう ふくしま！」など、他県との差異化を図るスローガンとして、連帯の象徴として「ふくしま」表記は効果的に多用されていた。

その一方で、「福島」という地名が重大な原発事故の代名詞となり、福島県にまで「フクシマ」という負のイメージが付与されることを恐れ、「東京電力福島第一原発の名称から『福島』を省くわけにはいかないだろうか」と提案している（『福島民報』2011.9.17）。『朝日』でも「暗いイメージをふっしょくし、福島県民が未来に希望を持てるように、たとえば福島第一原発の名称から『福島』を外して『東京電力第一原発』などとするのはどうでしょう」と提案する、福島県在住の大学生の投稿が見られた（『朝日新聞』2011.4.30 朝刊）。7月12日には、「『フクシマ』はチェルノブイリ同様、放射能汚染地域というイメージしか浮かばないから県名を変えては」と提案する外国人弁護士の投稿に対し、福島に住む62歳の高校教師は次のように反論している。

広島、長崎が原爆投下のイメージをぬぐい去るため、県名を変えたか。ニューヨークが同時多発テロの悲劇のイメージ払拭（ふっしょく）のために州名・市名を変えたか。否である……いかなる土地にも長い歴史があり、豊かな自然や文化、人々の暮らしがあり、住民は郷土を愛し、誇りを持っているのだ。地名はそのシンボルである……「福島」は原発事故からの見事な復興の象徴としていかなければならない。それなくして世界の人々の日本への信頼回復はあり得ない（『朝日新聞』2011.7.12 朝刊）。

『福島民報』同様、福島在住の市民も郷土としての「福島」と、原発事故という事象としての「フクシマ」を明確に切り離してとらえ、「フクシマ」の負のイメージが「福島」自体に付与されることを危惧していることがうかがえる。

『福島民報』ではコラム欄の「あぶくま抄」や論説など、新聞社の主張が表明されている記事の中で「ふくしま」という呼称が積極的に使用されていた。他の3紙でも「ふくしま」表記は散見されたが、その使用法は異なる。『読売』と『河北』では主に福島県で行われている、あるいは福島発の催し物でのスローガンやキャッチフレ

ーズとして「ふくしま」は引用されていただけで、『福島民報』のように積極的な意味づけはされていなかった。その代わりに、「福島」という漢字表記に「ふくしま」的な意味が付与されている記事が見られた。たとえば『読売』の「編集手帳」では、片仮名の「フクシマ」という呼称に対し、「豊かな実りと、美しい風景と一天の恵みが地に結晶したような漢字の『福島』に、早く戻さねばならない」（『読売新聞』2011.4.2 朝刊）と表現され、『河北』では「フクシマと書くと偽色をおびてくるやうな気がして福島と書く」（『河北新報』2012.2.26）といった短歌が掲載されている。2紙において使用されている「福島」表記は、『福島民報』における「ふくしま」と異なり、読者投稿と新聞社説、あるいはコラムの中、というように混在して使用されていた。

社説やコラムなどで、「フクシマ」表記を他紙よりも圧倒的に多用していた『朝日』だが、「ふくしま」表記は主に読者投稿や歌壇コーナーで散見された。つまり、『福島民報』が「ふくしま」表記を新聞社自身がスローガンとして使用していたのとは対照的に、『朝日』ではオーディエンスが『福島民報』同様、当初から破局的事象としての「フクシマ」と、連帯と再生の象徴としての「ふくしま」を明確に区別して使用していたことがわかる。中でも、「ふくしま」表記が短歌や俳句という形式で表現されていたことは特筆に値するだろう⁸。ここからは、一般記事からだけでは決して見出せない、決められた字数の中で気持ちを表現する短歌・俳句ならではの、オーディエンスの多様な福島像を垣間見ることができる。

以上のように、各紙の「ふくしま」と「福島」の使用法、およびその語り手に違いはあるが、「フクシマ」という負のイメージが他の表記に付与されることを危惧している点では、全紙共通していた⁹。

(2)各紙における「フクシマ」

一貫して負のイメージを漂わせる「フクシマ」だが、全国紙の「フクシマ」表記の意味合いに、時間を経て連結されるサブテーマや例示によって変化が見られてくる。過去の原発事故、特にチェルノブイリ原発事故は、事故発生時から比較の対象として各紙で取り上げられていた。全国紙2紙は当初、いかに「フクシマ」をチェルノブイリと同等、あるいは越える言葉にならないようにするか、そして他国にそのようなイメージをもたれないようにするかに焦点を当てていた¹⁰。

しかしその後、被爆体験の「ヒロシマ・ナガサキ」などと並置して語られていくことで、忌避すべき事象としての「フクシマ」表記に、克服し再生へと向かうための「ふくしま」的な意味が混入していく。たとえば、『朝日』は当初、「ヒロシマ・ナガサキ」とともに「負の遺産」（『朝日新聞』2011.4.10 朝刊）と表現していたが、「廃虚からのヒロシマ、そしてナガサキの復興に世界は目を見張った。今度は、新生フクシマが地球大で記憶されるときだ」（『朝日新聞』2011.6.12 朝刊）と、「ヒロシマ・ナガサキ」という被爆と戦争への怒りや悲しみと、原発事故による被曝が並列して語られることで、「フクシマ」という単体の事象の克服から、人類共通の課題である核廃絶と平和への祈りへとテーマは広がっていく。

『朝日』とは対照的に、『読売』は「日本人は『ヒロシマ』『ナガサキ』に加えて『フクシマ』も経験し、原子力の怖さを最もよく知る国民だ。だからこそ、それをバネに得意の技術力で安全性を突き詰めるという選択肢もありえる」と、「フクシマ」を克服したうえで原発を継続して使用していく姿勢を暗示している（『読売新聞』2011.8.7 朝刊）。原発事故の発生した地域としての福島県を指すだけでなく、国内外の原発政策に影響を及ぼしかねない「フクシマ」という意味づけが如実に現れている。対照的な主張の2紙だが、その根底には負のイメージの「フクシマ」表記を、平和の象徴へと移行しようという思惑が読み取れる。

地方紙2紙においても、「フクシマ」表記は微妙なズレを生じさせている。『河北』は震災から半年の社説において、「国内外からの観光客は福島だけでなく、東北全体を忌避している。世界地図に落とせば『フクシマ』と『トウホク』は点でしかない」と、「フクシマ」を内包した「トウホク」として一緒に語られることで、国内だけでなく、世界からも東北全体が忌避されていることを憂慮している（『河北新報』2011.9.11）。そのうえで「天災と人災に痛めつけられて見えてきた古くて新しい課題」として「東北は一つか」と問いかけている（『河北新報』2011.9.11）。『福島民報』が想定する「古里」が「絆をさらに固めよう。美しい古里をよみがえらせ、歴史と伝統を未来へつないでいこう。ふくしまは負けない」（『福島民報』2011.4.11）というように、福島県であるのに対し、『河北』が想定する「古里」は「東北」である。『河北』はいかに「フクシマ」という負のイメージを切り離し、「福島」を「東北」へと回収し、一つの共同体としての「東北」を保持するかを模索していた。ここからは、「被災地」として一括りに語られがちな東北と福島の間ズレが生じていることがわかる。「フクシマ」は、被災地と

非被災地という境界線だけでなく、「被災地」内でもズレを生じさせていることがわかった。

5. 結論

(1) 本研究の成果

本研究最大の成果は、震災の状況変化や各紙の立場によって流動的に変化していった、福島が多様なレトリックの発見にある。また、新聞社の主張だけでなく、オーディエンスの語る福島像を投稿や歌壇コーナーから抽出したことも、本研究特有の貢献だと考える。さらに、「フクシマ」をめぐる各紙のレトリックからは、全国紙と地方紙というメディアの差異や、「フクシマ」と「ふくしま」という二項対立的な表記、一緒に語られがちな「被災地」という存在に回収できない、多層的な名づけと意味づけのせめぎ合いを見出すことができた。

(2) 今後の課題

今後は震災前後での福島の位置づけと意味の変遷も分析していく必要があるだろう。特に、震災以前もキャッチフレーズとして使用されていた「ふくしま」が、「フクシマ」の出現により従来の使用法からどのように変化していったかは重要である。原発に関しては震災以前も多くの議論がなされてきたが、その中で福島県はどのように表象されていたのか。そして原発事故後、以前の表象はどのように変容していったのか。あるいはしなかったのか。

また、今回検証しきれなかった問題にも言及したい。「フクシマ」の出現によって大震災の「被災地」内外で生じている認識のズレや、核の問題として並列して語られる「ヒロシマ・ナガサキ」と「フクシマ」の関係、さらには「チェルノブイリ」や「アウシュビッツ」と並列して語られることの意味など、より広い文脈の中で福島表記について考察していく必要があるだろう。

補注

¹ 『福島民報』は「福島」や「フクシマ」、「ふくしま」といった表記との混同を防ぐために、省略せずに記載する。

² 誤解のないよう付記すると、二つの事象の差異を「けっして無視したり単純化したりしてはならない……重要なのは、この差異を正確に見積もることである」(Nancy 2012: 30) との主張にもあるように、単純に関連づけるという意味ではない。

³ 「ふくしま」表記自体は、震災以前から各紙で使用されていた。主に、福島県のイメージアップの宣伝文句として考案された「うつくしま、ふくしま」(『読売新聞』1991.11.28 夕刊)、そしてその後継となるスローガン「ほっとする、ふくしま」(『福島民報』2010.7.20) といった、キャッチフレーズ内で使用されていた。『河北』は「ふくしま イメージ新年」と題した記事の中で、「観光地が点在し交通網が縦横に走るわが福島県。これほどの好条件を備えながら全国的にはいったいどこにあるのやら、ちっとも知られていない……まだまだ『福島』はマイナーだ」という認識を表明し、福島県の全国 PR を模索していた(『河北新報』1992.1.1)。上記のように、震災以前の「ふくしま」表記は、各紙の中で福島県を PR するためのキャッチフレーズやスローガンとして使用されていたことがわかる。

⁴ 他にも、世界的に評価された『石巻日日新聞』の「震災翌日の3月12日からの6日間、油性ペンで手書きした壁新聞を発行し、避難所に貼りだした……極限状況の中でジャーナリストが地域社会に貢献した活動」(藤竹 2012: 44) が挙げられる。

⁵ Pan らは、有意味な要素を結合化していくシステムとして、4つのフレーミングデバイスを提示する (Pan & Kosicki 1993)。

① シンタクティクス構造——文章内の言葉やフレーズの配置の安定したパターン。逆ピラミッド構造は、構造的要素の一連の編成(ヘッドライン、リード文、エピソード、結末)に言及する。また、「客観性」は3つの方法、すなわち1. 経験的妥当性の主張 2. 専門家の引用 3. 経験的データ(公的ソース)の引用というフレーミングデバイスとして効果的に使用される。

② スクリプト構造——5W1Hによるニュースの発生からクライマックス、結末の描写。

③ セマティック構造——様々なサブテーマ、あるいはトピックを連結する1つのテーマを伴う多層的ヒエラルキーを指す。ここでいうテーマについて Pan らは「テーマは項目(topic)と同じではない……一つの記事の様々なセマティックな要素(行為や行為者の描写、情報源の引用、情報の背景)を、一つの首尾一貫した全体の中へ連結する考えである」と説明し、「この構造的機能のため、テーマはフレームと呼ばれる」と主張する (Pan & Kosicki 1993: 58-9)。

④ レトリック構造——記事の性格を伝えるための表現法の選択。ジャーナリストはイメージを喚起し、要点の顕出性を高め、報告の鮮明度を増すためのレトリック装置が該当する。これは William A. Gamson と Andre Modigliani が提示した「メタフ

アー」、「例示（過去、あるいは現在の教訓として語られる現実の出来事）」、「キャッチフレーズ」、「描写」、「視覚イメージ」という5つのフレーミング装置を指す（Gamson & Modigliani 1989）。その他には具体的な数値や主張などもレトリック構造とみなす。

⁶ 『読売』と『朝日』の分析対象記事は東京版に限定した。

⁷ 「原発反対派の勝因は『フクシマ』に違いない」（『読売新聞』2011.6.15 夕刊）、「（スリーマイルとチェルノブイリ原発事故と）フクシマを含めて『三大』となるのは現時点の規模でも間違いない」（『朝日新聞』2011.3.16 朝刊）、「汚された大地と『フクシマ』というレッテル」（『河北新報』2012.1.1）、「世界が注視する『フクシマの核危機』」（『福島民報』2011.3.28）というように、原発事故の記号的表現として「フクシマ」は多用されていた。

⁸ 「ふくしまがフクシマとなり FUKUSHIMA となりたる訳の重過ぎる訳」（『朝日新聞』2011.4.24 朝刊）、「フクシマのニュースに戦（おのの）く我もまた火遊び覚えし猿の裔なり」（『朝日新聞』2011.5.16 朝刊）、「福島がフクシマとなり夏来る」（『朝日新聞』2011.5.30 朝刊）、「抜け駆けのように逃げ出たふくしまの恋し恋しく子らのふるさと」（『朝日新聞』2011.5.2 朝刊）といったように、27本の記事の中で合計32の俳句と短歌が抽出された。

⁹ たとえば、福島県在住の主婦の「どうか皆さん『ふくしま』を嫌わないでください。『ふくしま』のラベルを見るだけで『買わない』と決めないでください」（『朝日新聞』2011.3.25 朝刊）といった声や、「福島をフクシマにするレベル7」（『読売新聞』2011.4.16 朝刊）、「『ふくしま』という名のいじめに負けぬよう強く生きよと二歳の孫に」（『河北新報』2011.7.10）といった俳句や短歌が散見された。

¹⁰ 『読売』は「大規模な被害をもたらした旧ソ連チェルノブイリ原発事故のようにはなりそうにないことが分かってきた」（『読売新聞』2011.4.15 朝刊）と主張し、『朝日』は原子力サミットで「チェルノブイリでは原子炉が爆発したが、福島の事故では、原子炉は自動停止し、放射性物質の放出も限定的だった」とアピールした、高橋千秋外務副大臣の言葉を引用している（『朝日新聞』2011.4.21 朝刊）。このように、あくまで「史上最悪」の原発事故はチェルノブイリという前提のもと議論が進んでいる。

参考文献

- 赤坂憲雄, 2012, 『3・11から考える「この国のかたち」——東北学を再建する』新潮社。
- Bourg, Dominique & Whiteside, Kerry H, 2012, *Vers une démocratie écologique: le citoyen, le savant et le politique.*(=2012, 松尾日出子 訳『エコ・デモクラシー：フクシマ以後——民主主義の再生に向けて』明石書店。)
- Bruno, Tino, 2013, 「日本の新聞が原子力の『平和利用』の推進に果たした役割」日仏会館・フランス国立日本研究センター編『震災とヒューマニズム——3・11後の破局をめぐって』明石書店, 120-129.
- Dupuy, Jean-Pierre, 2013 「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園——ヒロシマ、チェルノブイリ、フクシマ」日仏会館・フランス国立日本研究センター編; 岩澤雅利, 園山千晶訳『震災とヒューマニズム——3・11後の破局をめぐって』明石書店, 59-70.
- 遠藤薫, 2012, 『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか——報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』東京電機大学出版局。
- 藤竹暁編著, 2012, 『図説 日本のメディア』NHK出版。
- 福田充編著, 2012, 『大震災とメディア——東日本大震災の教訓』北樹出版。
- Gamson, William A. & Andre Modigliani, 1989, "Media Discourse and Public Opinion on Nuclear Power: A Constructionist Approach," *American Journal of Sociology*, 95(1): 1-37.
- 玄侑宗久・和合亮一・赤坂憲雄著, 2013, 『被災地から問う この国のかたち』イーストプレス。
- 井川充雄, 2002, 「原子力平和利用博覧会と新聞社」津金澤聡廣編著『戦後日本のメディア・イベント——1945-1960』世界思想社, 247-265.
- 河北新報社, 2011, 『河北新報のいちばん長い日——震災下の地元紙』文藝春秋。
- Nancy, Jean-Luc, 2012, 渡名喜庸哲訳『フクシマの後で——破局・技術・民主主義』以文社。
- Pan, Zhongdang & Gerald M. Kosicki, 1993, "Framing Analysis: An Approach to News Discourse," *Political Communication*, 10(1): 55-75.
- 鷺田清一・赤坂憲雄, 2012, 『東北の震災と想像力—われわれは何をかわされたのか』講談社。